OBOG Magazine

県大の星

SHIGA

USP STARS

USP STARS

05

2019 February

地偵人

卒業生の今

気象庁観測部計画課

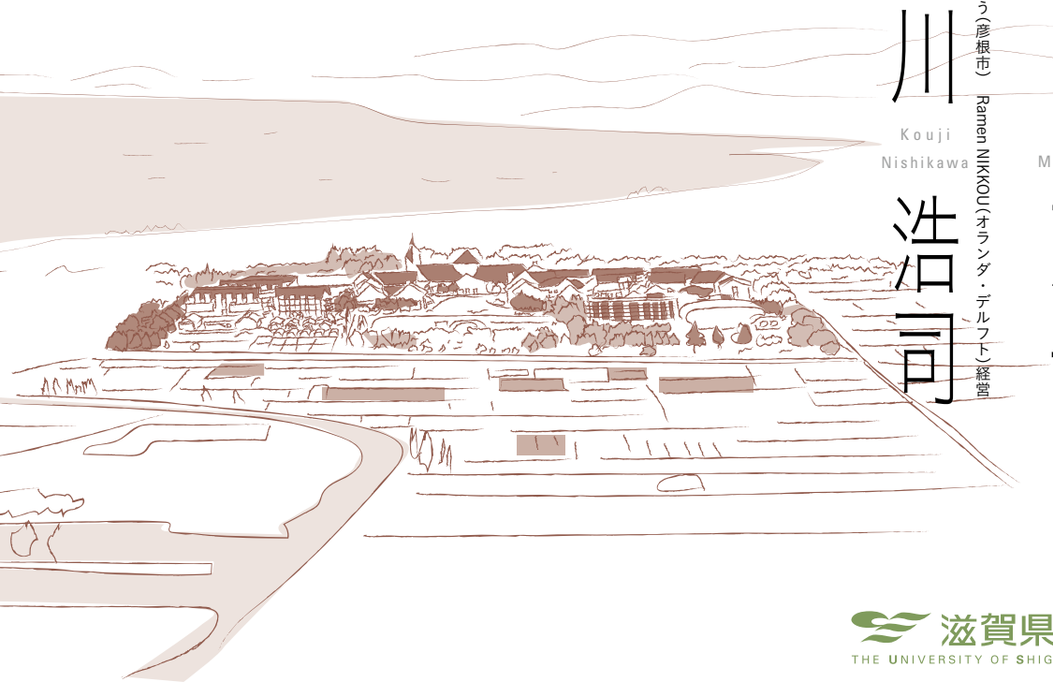
槙山 恵子

Keiko Makiyama

ラーメンにっこう（彦根市） Ramen NIKKOU（オランダ・デルフト）経営

西川 浩司

Kouji Nishikawa



滋賀県立大学

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

OBOG Magazine

USP STARS

05

2019 February

滋賀県立大学　OBOG Magazine
県大の星 _ 第 5 号

発行月 ｜ 2019 年 2 月
発行 ｜ 滋賀県立大学　経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200　Fax.0749-28-8470

企画・制作・編集 ｜ スパイス事業部 / 双林株式会社
アートディレクション / デザイン ｜ 澤田未来（スパイス事業部 / 双林株式会社）
取材 / 編集 ｜ 野田大輔（コメディア株式会社）
監修 ｜ 印南比呂志（人間文化学部生活デザイン学科教授）
印刷 ｜ 双林株式会社

OBOG Magazine

県大の星 SHIGA USP STARS

USP STARS

05

2019 February

地偵人

卒業生の今

キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。

で育った卒業生に滋賀県大教育の成果を探るインタビュー集、第5回

地球環境の未来と世界を舞台に日本人の可能性を偵(うかが)う。

「県大の星」。その名のとおり様々な国・地域や職業の最前線できらりと輝く先輩たちのインタビュー集、第5号の刊行です。

ところで「人は他のすべての動物と同じく自分で育つものだと考えてきた。人は粘土ではないから、こちらが思うように『作る』ことはできない。できるのはその人が自分で育つのを助けることだ。」という言葉をご存知でしょうか。

動物行動学者であり滋賀県立大学初代学長の故・日高敏隆先生が、開学十周年記念誌に寄せたコメントの一節です。今日も揺るがぬ滋賀県大開学の理念「人が育つ大学」は、先生の持論から生まれました。「育てる」のではなく「育つのを助ける」。やらされるだけの勉強や仕事がどれほど退屈か、逆に、やりたいことをやっている時間がどれほど楽しいか。どれほど力を出せるか。皆さんもご承知のはずです。

さて、今号に登場する先輩たちが見つけた「やりたいこと」とは。そして「育ち」の進捗は。地球環境の未来と世界を舞台に日本人の可能性を偵(うかが)う「地偵人」をテーマに、気象庁職員として昭和基地での越冬を体験した槙山恵子さん、そして日本ラーメン界の頂点を踏み台に世界へ飛び出した西川浩司さんにご登場いただき、現在の仕事やご自身の生き方と滋賀県大での学びや経験がいかに結びついているか、お話を伺いました。

ラーメンにっこう（彦根市）／
Ramen NIKKOU（オランダ・デルフト）経営

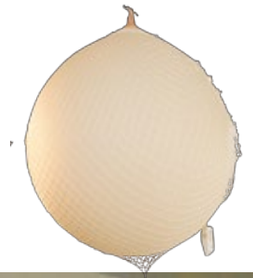
西川 浩司
Kouji Nishikawa

近江高等学校卒業
2004年度 人間文化学部生活文化学科
人間関係コース卒業

気象庁観測部計画課

槙山 恵子
Keiko Makiyama

大阪府立千里高等学校卒業
2007年度 環境科学部環境生態学科卒業
2009年度 名古屋大学大学院環境学研究科
気候科学講座修士課程修了



case 01 地偵人

槙山 恵子

気象庁観測部計画課

気象の分野で地域の安心・安全と地球の未来を支える

理科のエキスパートを目指していた中高生時代

中学生のころから理科が好きで、星座の観察や天気図の見方を覚えることが楽しみでした。興味はやがて地球環境へ。京都議定書が採択され、温暖化への取り組みをはじめ地球規模での環境保護が注目され始めた時期です。

受験の時期になり、環境系の学部を探していて出会ったのが滋賀県立大学です。理科のエキスパートになりたいと思っていた私にとって、物理や生物、化学、地学などすべてが網羅されたカリキュラムをはじめ、充実したフィールドワークや少人数制など、理想的な環境でした。

槙山　恵子

Keiko Makiyama

略歴：

2010 年、気象庁に入庁。沖縄県の那覇や石垣島の気象台勤務を経て
2014 年に本庁（東京）へ。地球環境・海洋部、オゾン層情報センターに勤務し、
2015 年末から 2017 年 3 月まで第 57 次日本南極地域観測隊に参加。
帰国後、観測部計画課で気象庁の国際的な活動を支えている。

気象庁内の気象科学館に展示してある
ラジオゾンデと気球。

フィールドワークは地域を意識するきっかけに

環境生態学科の学修領域は自然から生活まで多方面にわたっており、色々な立場から学ぶことができました。フィールドワークでは、地域の方からの聞き取りや、耕作放棄で荒れてしまった水田の再生に向けた調査などを行いました。何が正解かわからないまま取り組みましたが、人文や社会学系の学びを得られたことも大きな財産になっています。思ってもいなかった経験ができたり、いろんなことに目が開いたり、それも滋賀県大の魅力です。

米国へ短期留学

1回生の夏、異文化理解のプログラムを利用し、米国スーセ・マリーの大学に3週間滞在して英語研修を受けました。海外、外国語に接した第一歩でした。習熟度はともかく、この時の経験があったからこそ、外国語の学習を嫌いになることもなく海外と関わりのある仕事への興味も増しました。

青年環境NPO LEAFSで犬上川や琵琶湖畔のゴミ拾い

サークル活動としては、学内の青年環境NPO、LEAFSに入っていました。環境問題に興味を持っている学生が中心となり、彦根市周辺で環境に関する活動を行っていました。その一つが犬上川や琵琶湖畔でのゴミ拾いです。地味な上に楽ではない活動でしたが、初めて自発的に環境に関わった活動だったと思います。

清掃センターの人とも顔なじみになっていろんな話を聞くことができましたし、イベントなどでは子どもたちにゲーム感覚でごみの分別を教えたり、木や葉っぱで一緒に工作することもありました。

彦根地方気象台の仕事を見て実験が忙しくなり通学から進路を気象庁に下宿住まいへ

進路を気象庁に定めたのは、授業の一環で彦根地方気象台を見学したことがきっかけです。気象の勉強はしていても、それがどんな仕事になるのかイメージできていませんでしたが、目の前で刻一刻と変わる観測データと天気図をもとに予報を発表する、気象を仕事にするとはこういうことなのだと、心が大きく動いたのです。とはいえ、気象庁なんて敷居が高く手が届かないと思っていました。しかし、気象台で働く職員から直接話を聞いた後には「諦めたくない」と。大きな力を得たような気分でした。

最初の2年は自宅から通学しましたが、実験などが忙しくなり、3回生から下宿住まいを始めました。犬上川の河原での気温計測、水質分析や流速計測、さらに琵琶湖では採氷や泥の採取とその分析、ピンポン玉を使った離岸流の観測も行いました。3回生の後半からは、午後のほとんどの時間を観測や実験に費やしました。

倉茂先生から気象学を学べたことも幸運でした。単位を取った後も再度受講したほどです。滋賀県大の先生は皆さんそうかもしれませんが、私たち学生が思いついたテーマを大事にしてくださり、興味を持ったことを研究材料にしなさいと背中を押してくれました。と思えば、日本語には大変厳しく、レポートにしろ卒論にしろ、真っ赤になって返ってくることも多々ありました。しかし、その経験は修士論文を書くときにも役立ちましたし、今の仕事にも活きています。

卒論のため、毎日えんぴつ塔の頂上へ

卒論にあたり、特定の条件（方角、時間）で写真を撮影しつづけるため、8ヵ月間毎朝9時にカメラを背負ってえんぴつ塔の頂上にのぼり、比叡山や荒神山などを定点撮影しました。対象物の見えやすさと気象条件の関係を探ることが目的です。遠い山がはっきり見える日もあれば、もやもやしている日もあります。ときには前日まで遡って、風向風速、湿度、大気中の汚染物質のデータと、山の写真の濃淡を表すピクセル値を結び付け、気象の可視化を行いました。どうしても撮影にいけないときにはゼミ仲間に頼んだこともあります。

滋賀県大時代に所属していた青年環境NPO LEAFSのホームページ
http://leafs-usp.wixsite.com/npoleafs

基地上空を覆うオーロラ

昭和基地全景

昭和基地の中心、19広場

卒論は、滋賀県大での学びの集大成ということもあり、最も思い出に残っています。協力してくれたゼミ仲間への感謝と、最後までやり遂げた達成感は忘れられません。

入庁後は、那覇、石垣島の観測所へ

気象庁に入庁して1年目は沖縄県の那覇へ。観測と予報の二本柱でチームを組み、その地方の天気予報を発表します。気温、雨、風など多くの気象要素が自動で観測される一方、雲の動きや種類は目視判別しており、これがとても重要な仕事でした。天気予報や注意報・警報の発表のほか、桜の開花など、生物や季節に関するお知らせも仕事のひとつで、シーズンになると毎日のように標準木に定めた桜の木を観察し、開花した日や満開となった日を発表していました。あまり知られていませんが、セミが鳴き始めた日や、トンボや渡り鳥の初見日も記録しています。地域によって異なりますが、全国でおよそ60前後の観測種目があります。各地の気象台が開設以来積み重ねられてきたデータです。目の前の気象の変化を伝えるのが天気予報だとしたら、こちらは長期にわたって環境の変化を知るための大切なデータとなります。ただ、これら生物季節観測は廃止の方針となっており、少しずつ数は減っていきます。

また、気象測器を適切に維持・管理することは非常に重要で、全ての部品をばらし、清掃してから組み立てることもあります。こうした作業は、気象庁ならではの思い出の一つです。

那覇に続いて石垣島の気象台に勤務しました。こちらは職員30名程度の職場で、観測に加えて予報の一部も経験しました。また、気象レーダーだけでなく、全国数箇所のみで行っている特別な観測も担っており、特殊な観測機器のメンテナンスに苦労しました。

気象観測と防災は深くかかわっていることから、小中学校で頻繁に出前講座を実施しており、講師として話をすることもありました。専門的な知識を分かりやすく解説することはとても難しかったですが、子供たちとの交流は楽しかったです。

57次観測隊の一員として南極へ

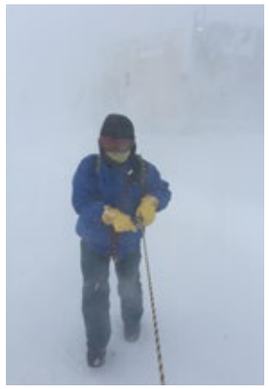
5年目に本庁へ。オゾン層情報センターを経て、1年後に念願の南極地域観測隊越冬隊員に選ばれました。まず4月に南極観測事務室に異動。2015年12月に出発し2017年3月末に帰国するまで、およそ1年2ヵ月を昭和基地で過ごしました。

日本国内と同様の地上気象観測に加え、成層圏までの高層大気の観測やオゾンの観測も行います。1年のうち約2ヵ月は太陽の昇らない極夜です。日本とは生活環境が大きく異なるうえ、1年以上日本に帰れません。過酷な状況であっても、一緒に生活する29人の隊員と助け合いながら、楽しく、快適に過ごすことができました。

地球の変化を見極める、過酷ながらもやりがいのある仕事

大変だったのは気球にセンサーをつけて飛ばす高層気象観測でした。気象庁は自動化を進めていますが、南極は今も職員が手で飛ばしています。飛揚は南極時間の14時半と2時半。観測時刻の約1時間前からセンサーの動作確認や気球へのガスの充てんを行い、飛揚の準備をします。高層気象観測専用の建物には、10mほどのタラップがあり、その先端から飛ばすと、障害物が少なく成功しやすいです。ただし、あまりの強風に危険だと感じたときは、タラップの途中で飛ばしていました。

南極では、ブリザードの具合によって隊長の判断で外出が制限され、観測を中止せざるを得ないこともあります。外出注意令の発令中は、二人一組で建物間を結ぶロープを伝って移動します。外出禁止令は平均風速が25mに達すると見込まれる場合に発令され、夜になると強風の中、雪が暗闇に渦巻いている状況で何も見えません。



ブリザードの中を移動した際の様子。

越冬最終日。この翌日、約 14 ヵ月ぶりに
「南極観測船しらせ」に帰艦する。

気象観測を通じて世界とつながる

帰国後は全国から集約される膨大な観測データの品質管理と、より短時間で処理できるようプログラムの改良に関わりました。現在は、国内だけでなく世界の気象機関と気象庁の連携を支援することが主な仕事です。アジア地域の気象の分野では、日本や中国のリーダーシップに期待されており、途上国の気象観測・予報技術の底上げに向けた支援が求められています。ワークショップなどを開催する場合は、会場の設営から講義内容のまで、あらゆることを組み立てます。

また、気象庁には、観測や予報の最前線で働く職員だけでなく、彼らの活動をシステムづくりで支える職員が大勢います。職員が海外へ出張する際には、全般にわたってサポートします。

本当にやりたいことを滋賀県大で見つけてください

気象庁の仕事は多岐にわたり、勉強は続きますが、常に次のことを考える姿勢や、努力して道を拓くという生き方を培ってくれたのは滋賀県大です。滋賀県大は入学してからの選択肢が多く、考えるための時間も材料もたくさんあります。それだけ自分の可能性を見出すチャンスが多いということです。自分が選んだ道ならやっていけるはず。失敗したら、そこから学べばいい。でも、挑戦もせずに逃げたら後悔しか残りません。受験に限らず、そこがいちばん大事だと思います。卒業してからの人生の方が圧倒的に長いですが、滋賀県大での学びや経験は、考えながら生きていくという人生の支えになるはずです。

皆さんも滋賀県大で本当にやりたいことを見つけてください。

1 海外から「気象レーダー」と「気象衛星」の専門家を気象庁に招いて開催した技術会合の模様です。（2018年 10月開催）参加国はタイ、マレーシア、ベトナム、ラオス、アラブ首長国連邦。東南アジア域における国境を越えたレーダー合成図の作成や、気象衛星ひまわりの観測から大雨や雷の発生を捉える手法の改良に向けて、各国を協力して取り組んでいます。
http://www.jma.go.jp/jma/en/photogallery/meeting2018.html

2 3 沖縄県石垣島気象台が世界気象機関（WMO）にて「百年観測所※」に認定され、認定プレートの除幕式に参加。国内では唯一の認定を受けた。
※100年以上にわたり同一地点で気象観測をしてきた観測所、世界に116カ所
https://www.jma.go.jp/jma/en/News/ishigakijima_long-term_station.html

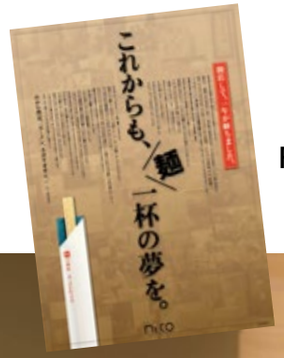
4 ルート工作作業の様子。氷上を安全に移動するため、氷の厚さを確かめながらルートを決定する。コンパスで方位を測っているところ。後ろは雪上車。
5 気象庁内の予報現業室。全国の気象状況を監視しながら天気予報を作成、発表する。
6 第 57 次越冬隊 30 名。
7 8 高層気象観測。最大風速 20.1m/s の中、ラジオゾンデを飛揚する瞬間の様子。
9 ドブソン分光光度計を用いて昭和基地上空のオゾン全量を測定している様子。

case 02 地 偵 人

西川 浩司

ラーメンにっこう（彦根市）
Ramen NIKKOU（オランダ・デルフト）
経営

ラーメンを通じて日本人の底力を世界に示したい



© T. HIRAI

滋賀県大志望動機

中高生時代は漫画家になりたいと思っていました。「それには人間観察が重要」という鳥山明さんのコメントを見て人間関係コースを選択。一方、日高敏隆学長の存在も滋賀県大を意識させる大きな要因でした。「学問とは、科学とは、世の中の役に立つ必要はないが、人々の世界観を変えるものでなければならない」と開学に際し語られた言葉を耳にしていたのです。意味はよくわかりませんでしたが「普通の大学と違う」そんなイメージを強く抱くようになりました。

滋賀県大の学食は教員も生徒も同じ食堂なので、実際に先生をお見かけすることもありました。「世界屈指の研究者が学食で生徒と一緒にうどんを食べている！」これこそ滋賀県大のすごいところだと、仲間と話したことを覚えています。

在学中はサークル活動にバイト、飲み会

人間関係コースでは教育学・社会学・心理学など幅広く学びました。深く勉強できたかどうかはわかりませんが、人間への興味を拡げるきっかけになりました。小さな学校ながら学びの分野は広く、それだけに学生も個性に富んでいました。先生方はそれ以上で、なおかつ寛容な方が多かったです。

友人たちとラーメンサークルをつくってひたすら食べ歩いたことも楽しい思い出です。そこで部長を務めたことが評価された

のか、有名ラーメンチェーンの彦根店開店時にはオープニングスタッフに採用され、卒業するまでアルバイトを続けました。秋の学祭、湖風祭では毎年、ラーメンサークルと所属していたゴルフ部で出店をしており、4回生のときにはラーメンを提供しました。

就活時代に入っても進路は未確定

就活の時期に入ると周りは忙しくしていましたが、私自身はまだピンと来ていない状態が続いていました。教員免許は取得しましたが、教師になることが目的ではなく、大学で学んだ証を親に示すためのものでした。教育実習には思い出づくりといった気持ちで臨みましたが、いざ教壇に立ってみるとなかなか面白いと感じたのです。なら真剣に採用試験を目指してみようと。ところが、その年は免許を取得した高校公民の採用がありませんでした。そこで方向性を少し改め、小学校の教員を目指して通信課程の教育学部に入学し、免許を取得しました。そこから次の採用試験まで、およそ1年。その間は講師として公立小学校に勤めることも考えました。

教員を志すも社会経験の必要性を感じ、起業

志望は教員に定めたものの、心に引っかかっていたのが高校の教育実習でお世話になった先生の言葉でした。「学校の外の景色を見たこともない教員が、これから外に出ようとしている子どもたちに、社会のことを教えている。そこに違和感を覚える」

確かにそうだと思いました。時代はどんどん変わっていくし、社会の仕組みや人間関係は複雑になる一方。このまま教員になると、40年近く世の中から取り残されることになるのではないかと。では、どこでその経験を得るか。腰掛けで就職したら雇用先に不利益を与えることにもなりかねません。ひとまず、誰にも迷惑はかけないだろうと選んだのが自営業、それが「ラーメンにっこう」の始まりです。

選択肢はいろいろあったと思いますが、背中を押してくれたのは「自分のやりたいことをやりなさい、そうすれば力を出せる、いちばんの成果につながる」という滋賀県大の教えでした。

友だちが考えてくれたお店のシンボルマークとスローガン

「ラーメン屋を始める！」といったらラーメンサークルの仲間をはじめ、みんなが応援してくれました。店名は自身のニックネームである「にっこう」に決めました。創業以来使っているシンボルマーク、そして「ラーメン、さぼりません」というスローガンは、生活デザイン学科の友だちが考えてくれたものです。

「ラーメン、さぼりません」

一つのことに没頭しがちな私自身のキャラクターを表現してくれたものだと思っていましたが、「やるならとことんやれ！」という滋賀県大生ならではのエールだったのだと、今さらながらに思っています。友だちに感謝し、友だちと出会わせてくれたこの大学に感謝しています。

「彦根・滋賀にまだない店づくり」を目指して起業

滋賀県でいちばん売れている店と、いちばん美味しいといわれている店でのバイト経験を通じ、業務の流れをはじめ、味や品質、価格に対する来店者の反応もつかんでいましたし、わずかですがバイト代の貯えもありましたので起業に不安はありませんでした。

「彦根・滋賀にまだない店づくり」を目標に試行錯誤からスタートしたので、オープンしてから半年は、毎週、いや毎日のように味もトッピングのネタも異なるラーメンをつくっていました。味が落ち着くとともに売り上げも安定してきました。一生やっていけるのではと思ったのが、今では代表的な人気商品になっているつけ麺の人気を実感したときでした。集客数に比例して売り上げも大きく跳ね上がったのです。

開店当時、彦根では珍しかったつけ麺も今ではおなじみの定番メニュー

失敗も学びになる

やがてお店も手狭になり、設備上の制約でやりたいこともできにくい状況になってきたので、創業店はスタッフに任せ、街なかに2号店を出店。インターネット通販の展開も始めました。

人通りのある商店街、集客に苦労はしないと考えていましたが、思ったほど客足は伸びませんでした。同じ時期に結婚しましたので生活費を稼がなくてはなりませんし、開店資金の返済もありました。さらにグルメフェスタでは大きな赤字をつくるなど、資金繰りも含めて大変な時期でしたが、通販が好調になるとともに、お店をもとの一店舗に戻して経営の改善をはかりました。失敗の繰り返しでしたが、貴重な学びとして今の自分を支えています。「行き詰ったときは視点を変える」という先生の言葉を思い出し、お客様のいない店内で小説を読みふけったこともありました。

次々と精力的に新しい事にチャレンジ。次世代ラーメンガツ盛り部門で優勝し、にっこうのラーメンがカップ麺に。

在学中のヨーロッパ周遊が世界進出の起点

海外を目指すきっかけとなったのが、3回生のときのヨーロッパ周遊旅行でした。本来はアメリカへの短期留学を予定していましたが、前年に起きた9・11テロの影響であきらめざるを得ませんでした。では、どこへ行くべきか。当時の英語の先生に相談したところ「陸続きでいろんな国を訪ねることができる」と、ヨーロッパを勧めていただきました。準備もそこそこに軽い気持ちで3週間の旅へ。一歩あるけば新鮮な発見と出会えるような経験をしたことで海外への興味がふくらみ、いずれは日本を離れて仕事をしてみたいと思うようになりました。

夜も盛況なラーメンにっこう彦根店。今では地元に欠かせない、皆に愛されるお店に。

ラーメンがもたらしてくれた海外との交流

2012年にベルギーのイベントに呼んでもらったときは、3時間待っても食べたいというお客様が数百人の行列をつくりました。自分の仕事を誇りに思えた瞬間です。

その後は米国ボストンで開催されるJAPANフェスにほぼ毎年出店しています。2017、2018年はNYラーメンコンテストにエントリーしました。他にはNYラーメンラボ、ロンドンで開かれた酒蔵のセレモニーイベントなどに参加。日本人のソウルフードであるラーメンが、外国の人たちに魅力的な食べ物として受け入れられていることを実感したのです。

国内では「最強の次世代ラーメン決定戦！※」で優勝を獲得し、食ベログでは滋賀県1位、また全国100名店入りを果たしていました。

そしてオランダでの出店へネットワークづくりで変化に対応

海外出店をするという目標を掲げたのは、ベルギーで大行列を経験した日のこと。期間を5年に定めたのは夢で終わらせないように

※Yahoo! JAPAN 特別企画

参加したベルギーのイベントでは大盛況。最高3時間待ちの長蛇の列。

ラーメンにっこう（彦根市）
Ramen NIKKOU（オランダ・デルフト）経営
西川 浩司
Kouji Nishikawa

略歴：
2004年　人間文化学部生活文化学科人間関係コース卒業
　　佛教大学通信教育課程教育学部教育学科入学
2005年　通信教育課程在学中に「ラーメンにっこう」オープン
2009年　「ラーメンにっこう2号店」オープン（2012年閉店）
2018年　家族でオランダへ移住、デルフトに「Ramen NIKKOU」オープン

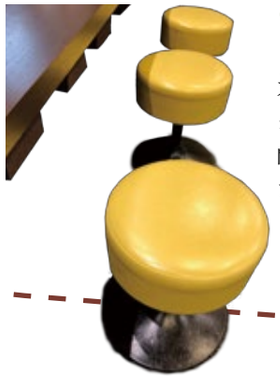
ラーメンにっこうオフィシャルホームページ
http://www.la-men-nikkou.co.jp/index.html

県大時代の思い出

USP アーカイブ Archive Vol.5

イラストレーション：GOIC 山本里士（滋賀県出身）

西川 浩司さんの場合



●～印象に残っている場所～　その1

来来亭彦根店

オープニングスタッフとして関わり、学生時代を通じてアルバイトしてきました。

●～印象に残っている場所～　その2

滋賀県大部室棟

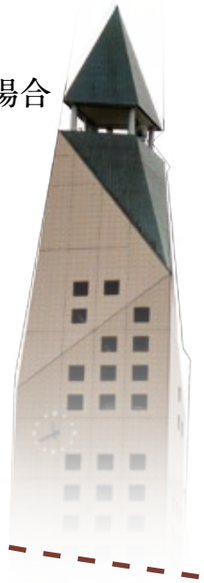
当時はBBQもOKで、サークルの仲間やゴルフ部の先輩後輩たちとよく飲み会を開いていました。

●～印象に残っている場所～　その3

人間文化学部棟の自習室

ここでたくさんの友人と出会い、人生最高の伴侶を得ました。

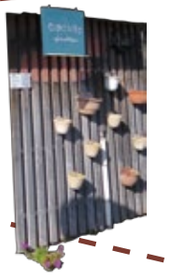
槙山 恵子さんの場合



●～印象に残っている場所～　その1

えんぴつ塔のてっぺん

卒論にあたり、特定の条件（方角、時間）で写真を撮影しつづけるため8ヵ月間、毎日9時にえんぴつ塔の頂上までのぼりました。卒論は、滋賀県大での学びの集大成ということもあり、最も思い出に残っています。協力してくれたゼミ仲間への感謝と、最後までやり遂げた達成感は忘れられません。



●～印象に残っている場所～　その2

西村カフェ

（現・エイトヒルズデリカテッセン）

学校の門から湖側へ出たところあるカフェです。学生時代にはよく行きました。

●～印象に残っている場所～　その3

テイクアウトのすし屋

調理補助のアルバイトをしました。売れ残りを持って帰れるという素晴らしいバイトでした。

今回はオランダ・日本間でのビデオチャット取材

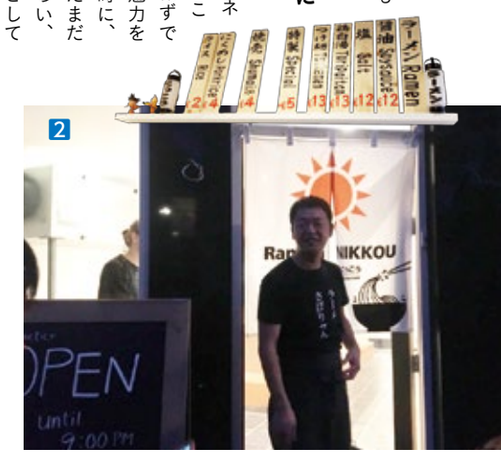
や、街の賑わいに親しみを持てたこともきっかけになっています。

モノづくりや人を育てる思いに滋賀県大マインド

「Ramen NIKKOU」がどんなビジネスになっていくのかは未知数ですが、こうして実際に行動すれば答えは出るはずです。オランダを拠点に「ラーメン」の魅力を広く伝えていくことが目下の目標。同時に、日本の強みを生かせるコンテンツがまだまだあることを日本の皆さんに実感してもらい、世界という舞台で客観的に見た日本人としての国民性や、日本人ならではの仕事について改めて誇りを持ってもらえるようなお手伝いができたらいいなと考えています。

うちには滋賀県大の後輩を含むアルバイト学生もたくさんいます。彼らにも様々な経験やチャンスをつかんでもらえる拠点や機会をたくさんつくっていきたいと考えています。

1



2

いまは並行して、アルバイトの立場でも海外出張や国内の大きなイベントに参加できるようにすることや、ボーナスを得ることができる評価制度の導入などを進めています。

自分らしく存分に学生生活を楽しめる環境、それが滋賀県大

「学生時代＝モラトリアム」というと賛否両論あると思いますが、私は肯定的にとらえています。学生時代は自由に使える時間が圧倒的に多いうえに社会的な責任も少ない。決して他人に迷惑をかけてはいけませんが、自分が興味を持てることや、やりたいことを最優先できる時期です。よい意味で自己中心的になるべき。自分の意志で動くからこそ、自ら答えを見つけることができます。自分の人生は自分のもの。失敗も成功も自分の財産。それを学べる環境が滋賀県大にはあります。滋賀県大に来たら、自分の心に耳を傾け、自ら行動してください。

6

5

4

3

1 2018年2月にオランダで開催されたイベントMONO JAPANに参加。パスタマシンで自家製麺の『オランダ仕様ラーメン』

2～5 2018年12月、オランダ・デルフトにてRamen NIKKOU OPEN

6 ブログ『ラーメンにっこう@DELFT オランダ出店日記』 https://ameblo.jp/nikkou-nl/